

土蜘蛛

前

ツレ 胡蝶

シテ 僧形の者

トモ 頼光従者

ツレ 源頼光

ワキ 郎等の一人

後

ワキ 前に同じ

ワキツレ 随行者

シテ 蜘蛛の精霊

地は 前は京都 後は大和

季は 雑

ツレ次第

「浮き立つ雲の行方をや。く。風の心地を尋ねん。

サシ

「是は頼光の御内に仕へ申す。胡蝶と申す女にて候。

詞

「さても頼光例ならず悩ませ給ふにより。典薬の頭

より御薬を持ち。唯今頼光の御所へ参り候。いかに誰か御入り候。

トモ詞

「誰にて御座候ふぞ。

ツレ

「典薬の頭より御薬を持ちて。胡蝶が参りたるよし

御申し候へ。

トモ

「心得申し候。御機嫌を以て申しあげうずるにて候。

頼光サシ

「こゝに消えかしこに結ぶ水の泡の。浮世にめぐる

身にこそありけれ。げにや人知れぬ。心はおもき小夜衣の。恨みん方もなき袖を。かたしきわぶる思ひかな。

トモ

「いかに申し上げ候。典薬の頭より御薬を持ちて胡蝶の参られて候。

頼光

「こなたへ来れと申し候へ。

トモ 「畏つて候。此方に御参り候へ。

ツレ 「いかに申し上げ候。典薬の頭より御薬を持ちて参りて候。御心地は何と御入り候ふぞ。

頼光 「昨日より心もよわり。身も苦しみて。今は期を待つばかりなり。

ツレ 「いや／＼それは苦しからず。病ふは苦しき習ひながら。療治によりてなほる事の。ためしは多き世の中に。

頼光 「思ひも捨てず様々に。

地 「色をつくして夜昼の。／＼。境も知らぬ有様の。時のうつるをも。おぼえぬほどの心かな。げにや心を転ぜず。其まゝに思ひ沈む身の。胸を苦しむる。心となるぞ悲しき。

シテ一声 「月清き。夜半とも見えす雲霧の。かゝれば曇る心かな。

詞 「いかに頼光。御心地は何と御座候ふぞ。

頼光 「ふしぎやな誰とも知らぬ僧形の。深更に及んで我を訪ふ。其名はいかにおぼつかない。

シテ 「愚の仰せ候ふや。悩み給ふも我脊子が。来べき宵なりさゝがにの。

頼光 「蜘蛛のふるまひかねてより。知らぬといふに猶ちかづく。姿は蜘蛛の如くなるが。

シテ 「かくるや千筋の糸すちに。

頼光 「五体をつゞめ。

シテ 「身を苦しむる。

地 「化生と見るよりも。く。枕にありし膝丸を。

抜き開きちやうと切れば。そむくる所をつゞけざまに。足もためず薙ぎ伏せつゝ。得たりやおうとのゝしる声に。形は消えて失せにけり。く。 (中人)

ワキ詞 「御声の高く聞え候ふほどに馳せ参じて候。何と申したる御事にて候ふぞ。

頼光 「いしくも早く来たる者かな。近う来り候へ語つて

聞かせ候ふべし。さても夜半ばかりの頃。誰とも知らぬ僧形の来りわが心地を問ふ。何者なるぞと尋ねしに。我せこが来べき宵なりさゝがにの。蜘蛛のふるまひかねてしるしもといふ古歌をつらね。

即ち七尺ばかりの蜘蛛となつて。我に千筋の糸を繰りかけしを。枕にありし膝丸にて切り伏せつるが。化生の者としてかき消すやうに失せしなり。是と申すもひとへに剣の威徳と思へば。今日より膝

丸を蜘蛛切と名づくべし。なんぼう奇特なる事にては無きか。

ワキ「言語道断。今に始めぬ君の御威光剣の威徳。かたぐゝ以てめでたき御事にて候。また御太刀附のあとを見候へば。けしからず血の流れて候。此血をたんだへ化生の者を退治仕うずるにて候。

頼光「急いで参り候へ。

ワキ「畏つて候。(中人)

ワキ一声

「土も木も。我大君の国なれば。いづくか鬼のやどりなる。其時一人武者すゝみ出で。彼塚にむかひ大音あげていふやう。是は音にも聞きつらん。頼光の御内に其名を得たる一人武者。いかなる天魔鬼神なりとも。命魂を断たん此塚を。

地

「崩せや崩せ人々と。呼ばゝり叫ぶ其声に。力を得たるばかりなり。下知に従ふ武士の。く。塚をくづし石をかへせば。塚の内より火焰を放ち。水

後ジテ

「汝知らずや我むかし。葛城山に年を経し。土蜘蛛の精魂なり。猶君が代に障をなさんと。頼光に近づき奉れば。かへつて命を断たんとや。

ワキ

「其時ひとり武者すゝみ出で。

地

「其時一人武者すゝみいでゝ。汝王地に住みながら。君を悩ます其天罰の。剣にあたつて悩むのみかは。

命魂をたゝんと。手に手を取り組みかゝりければ。
蜘蛛の精霊。千筋の糸を繰りためて。投げかけ
く白糸の。手足にまとはり五体をつゑめて。斃
れ伏してぞ見えたりける。

ワキ「然りとはいへども。

地「しかりとはいへども。神国王地のめぐみを頼み。

彼土蜘蛛を中にとりこめ。大勢みだれかゝりけれ
ば。剣の光に少しおそるゝ気色を便りに。切り伏

せく土蜘蛛の。首打ちおとし悦びいさみ。都へ
とてこそ帰りけれ。